

Title	五十年代台湾における文学状況：反共文学を中心に
Sub Title	Taiwanese anticommunist literature in the 1950s
Author	道上, 知弘(Michiue, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.78, (2000. 6) ,p.87- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0087">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0087</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 五十年代台湾における文学状況

——反共文学を中心に——

道上 知弘

## 序言

日本を除く東アジアにおける五十年代の文学状況を眺めた時、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国の「社会主義文学」陣営と、中華民国と大韓民国の「反共文学」陣営とに大きく分けることができる。これらの傾向は四十年代末に相次いで成立した新国家による言論政策の一環によるものであり、個々の作家の創造性は大いに圧殺され、「御用作家」たちが文壇を占領していた。無論、その大勢の中でも、それまでの文学史の流れを引き継ぐ流れは存在していたが、政府主導の言論操作の前には息を潜めているしかなかった。前後両者の断絶は一九五〇年六月に勃発した朝鮮戦争によって決定的なものとなり、より政治性重視の傾向を強めていくことになる。

これらの国々における五十年代の文学は、文学研究の対象として顧みられることは少なかった。それは、この時期に生み出された膨大な文学作品のほとんどが、内容がひどく均一的で読みものとしての面白みに欠けるばかりでなく、地

域的な問題に起因する緊張感、さらには東西陣營のイデオロギー対立を背景に持ち、単に文学研究の枠組みだけでは捉えきれないという煩雑さも災いしている。しかし現代史の出発点でもあるこの時期の文学にアプローチすることは、戦後文学史を読み解く上ではもちろん、今現在、東アジアを抱えている諸問題を考える際にも有益であろう。

以上のような視点を持ちつつ、今回は台湾の五十年代文学を取り上げる。台湾は日本の植民地支配から解放された後も外来政権に支配されてきたという点で、他の国とは違った事情を抱えている。その点にも注意しながら概況を整理してみたい。

### (一) 陳映真「山路」からみる台湾の五十年代

本論に入る前に、五十年代の台湾の雰囲気を知る手がかりとして、現在、台湾の知識人たちに当時がどのようなようにとらえられているか、その一例を見てみることにする。言論の自由を奪われていた台湾人が、蔣介石政権によるさまざまな弾圧を受けていた五十年代を少しずつ語るようになってきたのは、規制が緩んでくる八十年代に入ってからのことである。

著名な作家であり評論家でもある陳映真（一九三七～）には、「五十年代の研究」と彼自身が呼んでいる作品が三篇ある。「鈴璫花」（『文季』第一卷第一期・一九八三年四月）、「山路」（『文季』第一卷第三期・一九八三年八月）、「趙南棟」（『人間雜誌』・一九八七年六月）である。いずれも短編であるが、作家から見た台湾の五〇年代を知る上で貴重な作品である。今回はその中から「山路」を紹介する。

「山路」で描かれているのは、現代（八十年代）から回顧した五十年代の台湾に吹き荒れた「赤狩り」の時代と、そ

れが残した傷痕である。

五十歳近くになる女性、蔡千恵は原因不明の病気で入院し、著しい衰弱のために死の床にあった。看病する義弟の李国木は、その病因を、「叛乱罪」で三十年間政治犯として獄中であつた四人が仮釈放されたというニュースを報じる新聞を読んでからだと推測するが、それがなぜ兄嫁を苛んでいるのかがわからなかつた。釈放された四人のうちの一人は、彼らとともに逮捕され、処刑された国木の兄・国坤の親友だつた黄貞柏であり、むしろ喜ぶべきことであつたからだ。

千恵は懸命の看病の甲斐も虚しく亡くなつてしまふが、兄嫁の遺体を葬儀場まで送つた夜、国木は彼女の遺品を整理しているうちに、黄貞柏宛の分厚い封筒を見つける。

流麗な日本語で書かれたその手紙には、意外な彼女の告白と悔恨の情が綴られていた。

三十年前、黄貞柏、李国坤、千恵の次兄・蔡漢廷らは共産主義運動に身を投じて地下活動に従事しており、千恵は彼らの理想と活動とに深い尊敬の念を寄せていた。千恵はもともと黄貞柏の許嫁であつたのだが、彼に紹介された国坤にも「切ない乙女の恋心」を抱いていた。

だが、やがて彼らにも白色テロと逮捕の手が伸びるようになり、漢廷は逮捕される。当局と交渉した千恵の両親は、仲間の密告を「自首の条件」として彼に勧めた。その結果、貞柏は終身刑の判決を受けて入獄し、国坤は銃殺刑に処せられてしまふ。

「破滅的な心の挫折」を味わつた千恵は、自分たち一家の犯した罪の償いとして、貧しい国坤の家に、彼と他の地で結婚していた妻と偽つて身を投ずる決意をし、炭鉱で働く国坤の老父とともに懸命に働くようになった。やがて国坤の

弟・国木が大学を出て会計士として成功すると生活は次第に好転し、七年前から台北に移り住んだ千恵は次第に当初抱きつけていた国坤たちと「同じ夢」を忘れるようになっていた。

貞柏の出獄により急に過去を思い出した千恵は、国坤や貞柏らを忘れるほど「墮落」してしまっていた自分に「震えおののくような驚愕」を覚え、同時に生きる気力を失ってしまった。国木が努力してひとつひとつ築き上げた豊かな生活も、自分が彼に「政治を回避」し、「出世を求める」ように教育した結果であり、その生活に知らず安穩と身を任せていたことは、「資本主義の商品に飼いなられ、家畜と同じように」なった墮落以外のなにもでもなかった。自分たちの理想であった大陸での中国革命の「挫折」も、千恵にとっては大きな痛手であった。

彼女はそのような現在の自分の生活を否定することによって、過去の理想に殉じようとしたのである。

以上が「山路」のストーリーである。題の「山路」とは、三十年前に蔡千恵が、自分たちの理想や仕事、中国の幸福と希望の遠い姿を熱く語る黄貞柏とともに、その日紹介されたばかりの国坤に対する淡い恋心を抱きながら歩いた、曲がりくねった山道からとられている。その山道の思い出は千恵の原点であり、その後に訪れる艱難の象徴でもあった。

作者の陳映真自身も一九六八年六月から七五年四月までの七年間、『毛澤東選集』などの読書会から「民主台湾連盟」という組織を作った<sup>(2)</sup>という容疑で政治犯として獄中生活を送った経験を持つ。

陳映真は本名陳永善。評論家としては許南村の筆名を用いている。一九三七年十月六日、台湾竹南の出身である。小学校五、六年生のころ魯迅の作品を読み、それが彼の目を中国に向けさせる契機になった<sup>(3)</sup>という。

陳映真が「白色で荒廃した（白色而荒廢）」五十年代に注目し、その意味を文学という形で追求しようとしたのは、入

獄中に親交を深めた五十年代に逮捕された政治犯、思想犯たちの影響が大きいと思われる。彼らは何のために獄に繋がっていたのだろうか？

戦争に敗れた日本は、五十年にわたって植民地統治していた台湾の所有権を中国に渡した。歡喜に沸く台湾民衆は、「解放」のために大陸からやって来た国民党軍を大きな希望をもって迎えた。しかし、台湾に派遣された国民党軍は貧相な上に軍規が乱れており、腐敗した官吏たちは「接收」と称して日本時代の資産を没収し続けた。食料や生活必需品は高騰し、生活不安に陥った台湾人の中国人への期待は、軽蔑から反発へと変わっていった。台湾人は傍若無人に振舞う中国人たちを見て「イヌ去りてブタ来たる」と噂した。<sup>(4)</sup> イヌ（日本人）は吠える代わりに番もしてくれる。だがブタ（中国人）は食いあさる以外に能がない、ということである。

その台湾人の中国人に対する鬱積した不信と不満が一挙に爆発したのが、一九四七年二月二十八日に始まる「二・二八事件」である。専売局の摘発隊員がヤミタバコ売りの婦人に振るった暴力への抗議に端を発する台湾人の「反乱」は瞬く間に全島に波及した。台湾人の鬱憤は一般の外省人にも向けられ、台湾は騒乱状態に陥った。それを鎮圧するため大陸の蒋介石は援軍を派遣、台湾人に対する無差別の虐殺を繰り返す一方、動乱に乗じて「不穏分子」の大粛清を図った。この時に、事件に直接関与した者はもちろん、指導的立場にあった知識人たちの多くも粛清の犠牲になった。

二・二八事件当時、台湾の共産党は完全に組織化されていなかったのが弾圧を免れたが、大陸を追い出された蔣政権の次の矛先は、地下で活動を続ける共産黨員、及び共産主義の影響を受けた反体制活動家たちだった。蔣政権は台湾を「反共」と「大陸反攻」の一大拠点とすべく政策を打ち出し、その手始めに島内の共産勢力の撲滅を開始したのである。一九五〇年から一九五三年にピークを迎えるこの大弾圧は、同じく多くの著名人が「アカ」として弾圧されたアメ

リカのマッカーシズムと時をほぼ同じくしている。これは偶然ではなく、アメリカが反共政策の一環として台湾をその重要基地として措置していたからだと言われる。<sup>(5)</sup> 陳映真が獄中で出会ったのはこの時期に逮捕された人々である。<sup>(6)</sup>

二・二八事件から五十年代初頭の「赤狩り」に至る時期は、台湾人の作家たちにも重大な転機であった。日本統治時代よりも過酷な言論弾圧に遭った作家たちの中には筆を折る者が続出し、その結果生じた空白を「御用作家」たちによる反共文学の作品、蔣政権を賛美する作品<sup>(7)</sup>が占めるようになった。台湾人による台湾文学の歴史は、その流れを寸断されてしまったのである。

では、以上見てきたような背景を念頭に、反共文学に焦点を当てながら、具体的に台湾における五十年代文学の状況を概観していきたい。

## (二) 五十年代の文学環境と諸団体

五十年代の台湾の文学環境を簡潔に言うならば、大陸を追われて台湾にやって来た中国人により、「作家—評論家—読者、そして出版界、の独自の需給体制を確立し、台湾人はそれに割りこめることをもって名譽としなければならぬ」<sup>(8)</sup> というような「喧賓奪主（主客顛倒）」した状態であった。そしてさらに台湾人作家に不幸であったのは、それまで日本語で行っていた創作を突然、多くの作家たちにとって初めて接する言語である中国語（北京官話）に切り替えなければならなかったことである。当然、台湾人作家の活躍の場は著しく制限され、中国人作家の独壇場になっていった。二・二八事件の余波と時代を覆う白色テロの脅威も彼らの創作活動に暗い影を投げかけており、多くの台湾人作家がこの時期に筆を折った。また、三十年代、四十年代の中国を代表する老舍、茅盾、巴金、曹禺などによる著名な文学作品も国民

党時代の暗黒面を描いているものが多いために、そのほとんどが左傾文学として禁止され、若い中国人作家たちにとつても、ある種の「真空状態<sup>9)</sup>」を生み出していた。

日本植民地時代に培われた豊穡な台湾文学の成果も、中国からもたらされるはずであった文学的な養分も断絶された中で、全ての文学が蔣政権の文藝政策の一環として統制下に置かれたのである。

まず五十年代文学の流れは中国入文学と台湾入文学の二つに大きく分かれる。そして中国入文学は「反共・戦闘文学」と「懐郷文学」、低質な「通俗小説」とに分かれていく。この中で、国家のバックアップを受けた反共文学が最も勢力を奮い、他を圧倒したのは言うまでもない。

では、次にその反共文学が生み出された背景を見てみたい。

国共内戦に敗れた蔣介石政権は、共産党にチベットを除く大陸全土を制圧された一九四九年末、本格的に台湾にその本拠を移した。いったん下野していた蔣介石は一九五〇年三月に再び総統職に復帰すると同時に「一年準備、兩年反攻、三年掃蕩、五年成功」を唱え、悲願である「大陸反攻」を政策の根本に据え、同年五月二十日、戒嚴令を台湾全島に布いた。蔣政権は「山路」に見られるような反対勢力への過酷な弾圧を展開する一方で、台湾の政治的な安定を図るために言論政策を重視し、文藝団体を設立させることによって、全ての文藝思想を統制下に置き、政府の方針に添わせようとした。この前後に出された言論に関わる主な政令は次のとおりである。

一九四九年八月、「台湾省新聞雜誌資本限制辦法」公布。

一九五〇年三月、「台湾省戒嚴期間新聞雜誌管制辦法」公布。



一九五〇年十一月、行政院により紙不足のために新聞、雑誌の紙数が制限される。

一九五一年六月十日、行政院により新聞社、雑誌社の新登録が制限される。<sup>(10)</sup>

一九五二年四月九日、「出版法」が公布、施行される。

一九五三年、「台湾省戒嚴期間新聞雜誌管制辦法」が「台湾省戒嚴期間新聞雜誌圖書管制辦法」と改定される。

一九五四年十一月、内政部により「戦時出版品禁止或限制登載事項」が制定される。<sup>(11)</sup>

蔣政権がこの時、提唱していたのが「反共復國」と「反共抗俄」のスローガンである。これを受けて「戰鬥性第一、趣味性第二」を標榜する「反共抗俄文學」が盛んに書かれることになり、五〇年代文学の一大潮流となつてゆく。この「反共抗俄」とは「共產主義に反対し、俄国（ロシアソ連）に対抗する」という意味であり、同年六月に勃発した朝鮮戦争により、アメリカ帝国主義に対抗し朝鮮を援助するという「抗美援朝」キャンペーンを展開して作家やジャーナリストたちを総動員し、膨大な「抗美援朝文學」を生み出した社会主義陣営の大陸政権とは好対照を成している。<sup>(12)</sup>そしてこの朝鮮戦争による共產勢力の脅威が、台湾の「反共抗俄文學」の形成をも促進していたのである。

このように、政府によって言論や出版に対する管制が強化される中、一九五〇年三月に「中華文藝獎金委員會」（文藝會）が成立し、立法院院長の張道藩が主任委員に就任した。「奨助富有時代性的文藝創作、以激勵民心士氣、發揮反抗抗俄的精神力量。（時代性に富んだ文藝創作を奨励することによって、民心士氣を激励し、反共抗俄精神の力を發揮させる）」<sup>(13)</sup>という委員会設立の宗旨からも、その反共的性格を明確にうかがうことができる。委員会が活動を終える一九五六年十二月までの約七年間に出版された奨学金は十八回、表彰された作家は百二十人、三千人余りが投稿し、一千人以上が奨学

金や原稿料を得た。<sup>(14)</sup>

続いて同年五月には政府側の最大規模の文藝団体である「中國文藝協會」（文協）が成立を宣言、以後十年間にわたって文壇を主導し、「文協十年」と言われる時期を作りあげた。文協は傘下にある作家間の団結を重視し、また会員層の拡大と新人の養成に力点を置いていた。小説、詩歌、散文、音楽、美術、演劇、映画、舞踊など十九の部門に委員会を設け、台湾各地にその分会を置き、当初百五十人余りだった会員は一九六〇年には千二百九十人までに増加した。<sup>(15)</sup>

文協は「本會以團結國文藝界人士、研究文藝理論、從事文藝創作、展開文藝運動、發展文藝事業、實踐三民主義文化建設、完成反共抗俄復國建國任務、促進世界和平為宗旨。（本會は全国の文藝人士を團結させ、文藝理論を研究し、文藝創作に従事し、文藝活動を展開し、文藝事業を發展させ、三民主義文化の建設を實踐し、反共抗俄、復國建國の任務を完成させ、世界平和を促進させることをもって宗旨となす）」<sup>(16)</sup>と綱領に規定したが、その活動方針は文藝會と大差がないことがわかる。

文協は社会や軍への働きかけも積極的に行い、「軍中文藝運動」（一九五一年）、「文化潔清運動」（一九五四年）、「戰鬥文藝運動」（一九五五年）などを展開した。

五〇年代の十年間にはこの二大団体の他にも「青年反共救國團」（一九五二年十月三十一日）の下部組織である「中國青年寫作協會」（一九五三年八月二日）や、「台灣省婦女寫作協會」（一九五五年五月五日）など、全部でおよそ十四の文藝組織<sup>(17)</sup>が次々に成立した。

(三) 五〇年代の文藝雑誌について

これら諸団体設立の動きと平行して、文獎會の機関紙『文藝創作』（一九五〇年）、『中國語文』（一九五二年四月）、国防部の『軍中文藝』（一九五四年一月）、『幼獅文藝』（一九五四年三月）、『革命文藝』（一九五六年四月）、『復興文藝』（一九五六年十二月）など、政府の方針に追随する雑誌が多数創刊された。これらの雑誌は古繼堂氏も述べている通り、各誌の刊行の意図はどうかあれ、掲載される作品は獨創性に甚だしく欠け、「反共抗俄」、「反攻復國」のスローガンを繰り返すばかりであるが、それは政府の要求にじゅうぶん応えるものであり、その意味でどの雑誌も全く同じ特色を備えていたと言える。当然それらに掲載される作品も雑誌の体制指向の方針に従わざるをえなかった。

しかし、「反共」の枠内にありつつも、独自の路線を追求した雑誌も少数であるが存在した。雷震創刊の『自由中國』（一九四九年十一月―一九六〇年九月、全二百六十期）、夏濟安主編の『文學雜誌』（一九五六年九月―一九六〇年八月、全四十八期）などがそれである。今回はその中から『文學雜誌』を取り上げる。

主編の夏濟安は一九一六年、中国江蘇省呉興の生まれ。南京中央大学や上海光華大学で学んだ後、北京大学で教鞭をとっていた。一九五〇年に渡台し、国立台湾大学文学院外文系教授の教授に任じられた。彼の思想は基本的に保守的であるが、現実に即した文学を奨励し、多くの青年作家たちに発表の機会を与えることになった。

夏濟安の文学理念について褚昱志氏は次の五点にまとめている。

一、文学を手段に文壇で奇を衒ったことを主張するのではなく、足を地につけて注意深く良い文章を書くことを心がけ、同時に、根気よく、最後まで、確実に、やり遂げる精神でもって、文学に自らの力を尽くし、文章で国に報

いることを心がけなければならぬとした。

二、文学に対しては朴实、理知、冷静の作風を重んじた。

三、共産党の「煽動文学」に反対すると同時に、五十年代のプロパガンダ式の反共文学にも反対した。

四、孔子一派を打ち毀そうとする五四運動の主張に反対し、孔孟哲学の現代文人における重要性を指摘した。

五、胡適の唱える「人間的な文学（人的文学）」、「自由な文学（自由的文学）」の主張を尊重した。<sup>(19)</sup>

注目すべきは、第三、第五の点だろう。まず『文學雜誌』創刊の理念にもなった第五点であるが、胡適の言う「人的文学」は人間性と人格の尊厳を発揚するための文学であり、「自由的文学」は政府の指導によってではなく、各人の良心に従って創作する自由を求める文学である。<sup>(20)</sup>このような理念を持つ『文學雜誌』が、政府主導で画一的な反共文学に反対したのは当然のことだろう。彼にもいくつかの反共小説があるが、それは「真実を話」し、「その時代を反映し、その時代の精神を表現」したいという目的からで、スローガンを繰り返すだけの他の反共文学作品とは質を異にしている。『文學雜誌』は「反共」ではあるが、政府の方針に追随しなかったという意味で「親蔣」ではない。この点は特記に値する。

一九五九年三月、夏濟安がアメリカのワシントン大学に赴任したために『文學雜誌』は廃刊となったが、その後を受けて、白先勇、王文興らが『現代文學』（一九六〇年四月～一九七三年九月、全五十一期）を創刊し、六十年代の文学をリードする雑誌の一つになった。

#### (四) 反共文学の作家・作品について

台湾の反共文学作品は、おもに「政界作家」と「軍中作家」と呼ばれる二つのグループによって書かれた。「政界作家」とは党の諸機関に勤務しながら、「軍中作家」とは同じく軍の諸機関にありながら作家としても創作活動に従事していた者を指す。中でも軍中作家の数は多く、文壇においても大きな影響力を持っていた。しかし、両グループともに、台湾に来てから作家活動を始めた人々で占められており、その急場しのぎともとれる姿勢がこの一群の作品全体のレベルを下げていることも否めない。

これらの作家群が産み出した作品は画一的であり、どの作品も一定のパターンを持っている。王育徳氏の分析を借りると、「これらの反共小説は多く浅薄で、現実から遊離している。作者は共産主義の醜悪化を企図し蔣政権のために弁護する。結果として、筆になる人物は善玉と悪玉にはっきり分れ、構想と筋書きは公式化し、どの作品も『共匪』を打倒して大陸に凱旋するハッピーエンドになってしまふ<sup>(21)</sup>」ということになる。さらに、その「反共八股」と呼ばれる公式化のパターンを古繼堂氏は次の四点にまとめている。

- 一、愛情のストーリーを利用して反共を唱えている。
- 二、共産党が日本人と結託し、国民党を攻撃している。
- 三、知識人が誤って共産党に入り、後にその誤りに気付く。
- 四、共産党、日本軍らによって世の中の荒廃が造り出された。<sup>(22)</sup>

無論、一つの公式だけに則っていたわけではなく、複数の「公式」が組み合わされて、大量の作品が産み出されてい

た。さらに言えば、余りに観念的であったために、それらの作品が台湾の現実からはもとより、大陸の現実からさえも遠く乖離していたことも、後世の評価を低くした原因であると言える。

「政界作家」には尹雪曼、王藍、王平稜、姚朋、陳紀滢、潘壘、潘人木、端木方などがある。そのうちもつとも著名なのは、大陸でもよく知られている姜貴であろう。姜貴は本名王林度。一九〇八年、中国山東省諸城県に生まれ、一九四八年に台湾にやって来た。「中国人第一世代」の代表的な作家である。彼は大陸にいた時から抗日戦争を題材に創作活動を始めており、一九八〇年に亡くなるまでに全部で二十二の作品を書いた。

彼の反共小説には『旋風』、『重陽』、『白馬篇』などがあるが、その中でも共産党に協力した山東省の方氏一家の盛衰を描いた『旋風』<sup>(23)</sup>は、五十年代の台湾反共文学の代表作と言われている。共産党や日本軍と結託して国民党を追い出した方氏の人々は、後になって「覚醒」し、次第に共産党の方針に反対するようになったために、それを身内に密告され投獄されてしまう。獄中で述べられる「旋風だ。旋風。やつら（共産党）は旋風に過ぎない。」という彼らの後悔の言葉が作品全体を貫く主題である。この粗筋を取ってみても、先に引いた「公式」が当てはまるのがわかるだろう。

「軍中作家」の代表的な作家には、「三劍客」と呼ばれて注目された司馬中原、朱西寧<sup>(24)</sup>、段彩華の三人をはじめ、高陽、田原、姜穆、王祿松などがある。作品では、司馬中原の『荒原』、『狼煙』や、朱西寧の『八二三注』などがある。建国初期の大陸中国もそうであったように、軍出身の作家は既成作家を押しつける勢いで文壇を席卷していた。彼らは「政界作家」たちに比べると平均年齢が低く、台湾に来る前は学生だった者が多い。

当時の軍の文藝政策を見てみると、一九五〇年六月、国防部總政治部が『軍中文摘』（後に『軍中文藝』と改称）を創刊し、「軍中作家」たちの一大拠点が形成された。続いて一九五四年に「軍中文藝獎金」が設置され、一九五八年まで

に計五回出された奨学金を二百六十九人が受けている。<sup>(25)</sup>作家としてはほとんど初心者といってよかった「軍中作家」たちが一躍、文壇の一大勢力となることができたのは、このような軍による援助体制に負うところが大きかった。

「政界作家」にしろ「軍中作家」にしろ、彼らが台湾に来るまで文学から縁遠かったことは、文学をただの宣伝工作の道具として利用しようとする蔣政権にとって、むしろ好都合であった。その「反共」の流れの中にありながらも、独自の創作活動を展開しようとする動きもなくなかったが、厳しい検閲の下では大きな力になりえなかった。したがって、激しい共産党批判を行いながら、国民党官僚の腐敗をも糾弾して見せた姜貴の『旋風』などは例外の部類に入る。

現在では「五十年代Ⅱ反共文学」の図式でとらえられてきた文学史に疑問を呈する動きもある。同時代に微勢力とは言え、反「反共」文学が存在し、五十年代文学の一角をなしていたことも確かであるし、反共文学にしても、全ての作品が政策に追随して書かれたわけではなく、その文学性を見直すべきだという姿勢である。<sup>(26)</sup>だが、その作業に入るためには、まずこれら「反共文学」のしっかりとした評価と位置付けを行わなければならず、五十年代文学の研究は、依然として検討すべき問題が山積しているテーマだと言えよう。

### (五) 断層期の台湾人文学

最後に台湾人の文学についても一言しておかなければならない。これら圧倒的な中国人優位の文学界でも、やはり台湾人による文学は存在した。そして次世代へ繋ぐ命脈を細々とではあるが着実に保っていた。国民党の台湾人に対する国語政策は「一、国民は全て国語（中国語）に換え、公職に就くのも国語の能力は必須のものとする。二、国語ができないことは恥ずべきであるという観念を植え付ける。三、台湾語を禁止する。」<sup>(27)</sup>というものであり、前にも述べたとお

り、生まれた時から日本語教育を受けてきた若い作家たちにとって、中国語、特に白話文（話し言葉）での創作は限りなく不可能に近いことであった。困難な状況の下、多くの台湾人作家が筆を折る中で、自らの刻苦勉強によって言語の障壁を克服した者たちによって執筆が続けられた。その中で文奨會など各種懸賞の奨金を得た作家も少なくない。上位入賞者の中から台湾人作家のものを探せば、

一九五二年 廖清秀 『恩仇血淚記』（國父誕辰記念長篇小説第三獎）

一九五二年 李榮春 『祖國與同胞』（文學生活補助金一一二）

一九五六年 文心 『諸羅城之戀』（創作獎金）

一九五六年 鐘理和 『笠山農場』（國父誕辰記念長篇小説第二獎）<sup>(28)</sup>

などが挙げられる。

彼らの多くは終戦時に二十歳前後で、日本統治時代が終わると敢然と中国語の学習に挑戦していった。中でも鐘理和<sup>(29)</sup>は一九六〇年に結核によって亡くなるために、その文学活動は五十年代に集中している。『笠山農場』は日本時代初期から戦後初期までの土地の変遷を通して農民の生活を描き、自ら経験した同姓恋愛（姓を同じくする者同士の結婚は忌まわれていた）の苦悩を告白した彼の代表作であるが、受賞したにも関わらず、彼の生前に出版されることはなく、貧困の中で世を去った。彼が評価されるのは、張良澤氏らによって紹介される七十年代を待たねばならない。こうしたことから当時の台湾人作家が置かれていた境遇がうかがえよう。

ただ、「反共」一色の文壇の主流から孤立した逆境の中で、彼らが示した抵抗精神は確実に次世代へと受け継がれていったという事実だけは、ここで強調しておきたい。他にも挙げなければならない台湾人作家が数多くいるが、それを



含めた五十年代の台湾人文学については稿を改めて詳しく論じることにする。

### 結語にかえて・「台湾文学」とは

これらの反共文学や、もう一つの大きな潮流であった懐郷文学は、どこまでも台湾における「中國流亡文學」という「中国文学」の一派であって、台湾人の手になる「台湾文学」ではない。一步譲歩して、台湾という土地に根ざした文学を「台湾文学」と呼ぶとしても、それらが台湾で書かれなければならなかった必然性が認められない限り、この時期の中国人による文学は「台湾文学」ではない。無論これは筆者の立場であって、「台湾文学」の範疇の定め方は各人各様であり、専らそれについて論じたものも少なくないが、明確な定義を与えることは今なお困難である。むしろ余りに明確すぎる定義には疑ってかからねばなるまい。それは「台湾文学」を「中国文学」の一部と認めるか否かという避け通れぬ問題が、その定義にいつその歯切れの悪さを強いているのも一因している。発言者に「文学」を超えた政治的な立場の選択と表明を迫るからである。

しかし、戦後の台湾現代文学史は、台湾人作家と中国人作家とのせめぎ合いにより試行錯誤を繰り返し、一方でお互いに切磋琢磨しながら現在の姿を形づくっているということは事実であり、現在では台湾生まれの中国人作家が増えてきたということもあって、両者の間の線引きはますます難しくなっている。とは言え、五十年代の台湾においては圧倒的に有利な条件で中国人作家たちが文壇を独占し、台湾人作家の活動を大いに制限していたということも厳然とした事実である。さらに、戦後、中国に「復帰」した台湾の台湾人文学の流れを強引に寸断したばかりでなく、路頭に迷う台湾人作家たちが「中国文学」に合流することをも阻んでいたのは、他ならぬ中国人の蔣政権による文藝政策であるの

は、これまで見てきた通りである。台湾現代文学史はこれらの事実を念頭に置いた上で考えられなければならない。

その意味でも、現代史の出発点である「空白的歴史」と呼ばれてきた五十・六十年代に焦点を当てることは、決して無益ではないと思われる。さらに五十年代文学の主流であった「反共抗俄文學」を、序言で述べたような東アジア現代文学史の中でとらえるならば、単に台湾だけの問題にとどまらない新たな発見もあろう。すなわち「反共」という点で同じ陣営に位置していた韓国における「戦後文學」、あるいは立場は正反対だが、その政治性や形式の公式化において符合することの多い大陸の「抗美援朝文學」との比較においてである。もちろん先に述べた陳映真ら知識人による五十年代を思想的にとらえ直す動きも見過ごしてはならない。それらの作業を経て初めてかの国の五十年代文学を位置付けることができるのではないだろうか。

近年、わが国でも台湾文学研究が盛んになってきた。しかし研究の対象は日本統治時代の皇民文学や、七十年代後半からのリアリズム文学（郷土文学）などにいささか偏重しているように思われる。本稿はそれらの間を埋めてゆくための、そして「台湾文学」とは何かを考えるためのはなはだ不十分な問題提起にすぎないが、これを足がかりとして、さらに今後の研究を深めていきたいと考えている。

## 注

- (1) 岡崎郁子氏による邦訳が『三本足の馬―台湾現代小説選Ⅲ』（研文出版・一九八五年四月）に収められている。引用部はこれに拠った。
- (2) 若林正文「語られ始めた現代史の沃野」。前出『三本足の馬―台湾現代小説選Ⅲ』所収。
- (3) 岡崎郁子「陳映真―中国革命に希望を抱きつづける政治作家」（『横浜商大論集』第十九卷第一号・一九八五年九月）岡

- 崎郁子『台湾文学―異端の系譜』（一九九六年四月）所収。
- (4) 王育徳『台湾―苦悶するその歴史』（弘文堂・一九六四年一月）一六〇―一六三頁参照。
- (5) 楊威理『ある台湾知識人の悲劇―中国と日本のはざまで・葉盛吉伝』（岩波書店・一九九三年二月）二四八頁参照。
- (6) 陳が彼らについて語ったものは「緑島の風声浪声」（『鐘鼓鐃』一卷七期・一九八三年七月）や「打起精神、英勇活下  
去吧！」（『夏潮論壇』一九八四年三月）などがある。
- (7) 蔣介石による独裁を正当化するために、蔣への個人崇拜も強化され、教科書や文学作品にも反映していった。これらの中  
で蔣は「民族的救星、時代の舵手、世界的偉人」と称えられている。このような政策を日本時代の「皇民化政策」に  
なぞらえて、「蔣民化政策」と言ふ。
- (8) 王育徳「恐怖と希望のはざまで―王拓と楊青矗」（『台湾海峡』（日中出版・一九九三年十一月改訂版）十三頁参照。
- (9) 葉石涛『臺灣文學史考』（文學界雜誌社・一九八七年）八六頁参照。
- (10) 「台湾省全省報紙、雜誌已達飽和點、為節約用紙起見、今後新申請登記之報社雜誌通訊社、應從嚴限制登記。（台湾省全  
省の新聞、雜誌はすでに飽和点に達したので、用紙の節約のために、今後新しく登録を申請する新聞社、雑誌社は嚴重  
に登録を制限する）」
- (11) 以上は『中華民國雜誌年鑑』（台湾省雜誌事業協會編・一九五四年）に拠った。
- (12) 拙稿「朝鮮戦争と中国の作家たち―巴金と五〇年代」（一九九七年八月・九月合併号）参照。
- (13) 「中華文藝獎金委員會、徵求文藝創作辦法」（『文藝創作』第一期（一九五一年五月））参照。
- (14) 李麗玲「五〇年代國家文藝體下の台湾文壇」―華大學文學研究所碩士論文『五〇年代國家文藝體下台籍作家的處境及其  
創作始探』第二章（一九九五年七月）に拠る。
- (15) 『文協十年』（中國文藝協會編・一九六〇年五月）三頁に拠る。
- (16) 前掲書二〇一頁参照。
- (17) 十四個の内訳は中國文藝協會、文協南部分會、中國語文學會、中國青年寫作協會、創世紀詩社、藍星詩社、台灣省婦女  
寫作協會、現代派、今日新詩社、中國詩人聯誼會、中華民國筆會、中國文藝界聯誼會、文協澎湖分會、文協中部分會  
である。薛茂松「近四十年來台灣地區文藝社團基本資料」（『文訊』第二十九期（一九八七年四月）七七―八三頁に拠る。

- (18) 古繼堂「五〇年代臺灣的文學概況」『臺灣小說發展史』（文史哲出版社・一九八九年七月）一五三頁参照。
- (19) 褚昱志「五〇年代的『文學雜誌』與夏濟安」『台灣文學觀察雜誌』第四期（一九九一年十一月）参照。
- (20) 一九五八年五月四日に行われた文協第八回会員大会での胡適の講演に拠る。前掲褚氏論文中に転載されている。
- (21) 王育徳「恐怖と希望のはざままで―王拓と楊青矗」『台湾海峡』一四頁参照。
- (22) 古繼堂「五〇年代臺灣的文學概況」前掲書一五七頁参照。
- (23) 脱稿は一九五二年一月だが、初版は一九五九年、明華書局より出版された。
- (24) 一九二六年、中国山東省生まれ。作家の朱天心、朱天文、朱天衣はいずれも実娘。
- (25) 彭瑞金「風暴中的新文學運動」『臺灣新文學運動四十年』（自立晚報出版・一九九一年）七八頁参照。
- (26) 例えば應鳳凰「『自由中國』、『文友通訊』作家群與五十年代台灣文學史」（一九九八年四月）などがある。
- (27) 前掲李氏論文第三章「五〇年代台籍作家的處境」参照。
- (28) 同前。
- (29) 鐘理和は一九一五年生まれ。全集八卷（遠行出版社・一九七六年）がある。一九歳から三十一歳までの間、大陸の瀋陽や北平（北京）に生活し、その頃から創作を始めていた経験を持つため、終戦当時すでに一定のレベルの中国語を身に付けていた。張良澤「倒在血泊裏的筆耕者」『笠山農場』（草根出版・一九九六年）所収参照。